

小林徳三郎

2025 11/22 (土) - 2026 1/18 (日)

小林徳三郎（こばやし・とくさぶろう／1884-1949）は、前衛洋画家集団フウザン会で活躍し、その後、春陽会で作品を発表するようになりました。彼は東京美術学校の後輩、萬鐵五郎の強烈な絵画をいち早く評価しましたが、自らは異なる制作姿勢を貫き、魚や野菜、家族、風景などの日常的な題材を親しみやすく、かつ、洒脱に描き上げました。写真家、洋画家、文学者、演劇関係者、美術評論家ら各方面からも認められた作品をご覧ください。



小林徳三郎《金魚を見る子供》1928年
東京国立近代美術館

大西茂 写真と墨象

2026 1/31 (土) - 3/29 (日)

数学から写真、そして墨象へ。唯一無二の道を歩んだ孤高の芸術家・大西茂（おおにし・しげる／1928-1994）。ニューヨーク MoMA をはじめ欧米で絶賛された彼の日本初となる本格的な回顧展を開催します。戦後日本が躍動を始めた 1950 年代、大西は位相数学に基づく独創的な写真と墨象を世に問いました。瀧口修造、ミシェル・タピエなど同時代のパイオニアたちを瞠目させた彼の芸術は、いま再評価の途上にあります。国際的に活躍した知られざる異才の探究は必見です。



大西茂（題不詳）1950年代
© Estate of Shigeru Onishi, courtesy of MEM

カール・ヴァルザー

2026 4/18 (土) - 6/21 (日)

20 世紀前半のスイスで活躍した異才カール・ヴァルザー（Karl Walser／1877-1943）は、ベルン近郊のビールに生まれました。20 代でベルリン分離派に加わり、象徴主義的で魅力的な絵画作品を残しています。1908 年にドイツの小説家ベルンハルト・ケラーマンと共に来日し、横浜や宮津（京都府）などに滞在して日本の風景や風俗を描きました。すべて日本初公開となる本展は、挿絵や舞台美術でも活躍したヴァルザーの全貌を伝える画期的な展覧会です。



カール・ヴァルザー《婦人の肖像》1902年
ゴッティフリート・ケラーマン（新ビートル美術館）蔵

前田寛治

2026 7/4 (土) - 8/30 (日)

33 歳でこの世を去った前田寛治（まえだ・かんじ／1896-1930）は、今なお日本の近代洋画界を代表する一人に位置づけられています。その評価の理由は、詩的感性と西洋絵画の伝統を踏まえた写実性の融合を追求しながら、多彩に芸術を花開かせたことにあります。前田の生誕 130 年と彼が設立に加わった一九三〇年協会 100 周年を迎える 2026 年を機に、前田が洋画の世界に何を築こうとしたのかを問い直します。



前田寛治《棟梁の家族》1928年
鳥取県立美術館

水滸伝

(仮称)

2026 9/19 (土) - 11/8 (日)

中国四大奇書の一つである『水滸伝』は、北宋時代末期、国政に不満を抱く宋江ら豪傑 108 人が梁山泊という要塞に集って革命を起こす物語です。16 世紀から 17 世紀にかけて成立した『水滸伝』は、江戸時代に日本に伝わり、爆発的な人気を得ました。本展はその物語をつぶさに紹介するのではなく、『水滸伝』を通じて北宋～清の中国美術、さらに江戸～現代にいたるまでの日本美術を広く展覧します。



歌川国芳
《通俗水滸傳豪傑百八人之一個
九紋龍史進 跳潤虎陳達》
文政10(1827)年頃 個人蔵

ニコライ・アストルップ

2026 11/21 (土) - 2027 1/31 (日)

20 世紀初頭のノルウェーで最も傑出した画家の一人として、近年、世界的にも評価が高まっているニコライ・アストルップ（Nikolai Astrup／1880-1928）。その日本初となる大回顧展です。雄大な自然に囲まれたノルウェー南西部、ヨルステル湖畔で育った彼は生涯のほとんどをこの地で過ごし、季節ごとに変化する風景を描きました。本展では油彩画に加え、独自の境地を拓いた木版画を含む約 130 点により、自然の輝きを体現したアストルップの世界を紹介します。



ニコライ・アストルップ《ルバーブ》1911-21年
DNB 貯蓄銀行財団／コーデ・ベルゲン美術館

山鹿清華

(仮称)

2027 2/20 (土) - 4/11 (日)

京都に生まれた山鹿清華（やまが・せいか／1885-1981）は、十代の頃に日本画と図案を学びはじめ、その後、神坂雪佳に師事して創作の幅を広げていきました。図案、糸の選択、織りに至る工程をひとりで行う「手織錦」によって、伝統的な図柄から、ロケットや機関車などの奇抜なモチーフまで自由に表現し、西陣織に新風を吹き込みました。明治、大正、昭和にわたり活躍した山鹿の仕事振り返る 40 年ぶりの回顧展です。



山鹿清華《手織錦掛屏 星屋・月・ロケット》
1958年 京都市美術館蔵

〒100-0005 千代田区丸の内 1-9-1 TEL.03-3212-2485
www.ejrcf.or.jp/gallery/ JR 東京駅 丸の内北口 改札前

開館時間 | 10:00 - 18:00 [金曜日 - 20:00] *入館は閉館の 30 分前まで

休 館 日 | 月曜日 [祝日の場合は翌平日休館。会期最終週・GW・お盆・SW 期間中の月曜日は開館]、展示替期間、年末年始

※開催内容・会期は変更することがあります。最新情報は当館ウェブサイトでご確認ください